

## 趣旨説明

中村 とも子

明日、三月十一日は二〇一一年に東日本大震災が発生した日です。千年に一度といわれた大地震が私たちに及ぼしたものは計り知れません。あの時に被害を受けた地域、個人の体験をきっかけに、様々な視点で、過去の、または未来の防災に焦点が当てられたように思います。

さて、今回（二〇一九年三月十日開催研究例会）は、災害が日常化しつつある今をとらえ直そうという試みです。昨年は水害や地震が相次ぎ、まさに日常的に自然災害が起きました。日常を、平穏な規則的な場所と時間にあることと捉えると、災害に遭遇することは、非日常、不規則な時間、そして慣れ親しんだ場所から引き離されることです。

八年前の大震災の後、いち早く東北に向かった人々の中に、研究者を中心とした外国人グループがあります。彼らはその経験を『東日本大地震の人類学』（T・ギル他編／二〇一三人文書院）という本にまとめました。その中で、全国からの支援物

資やボランティアの援助を受けることについて、これは贈り物だから、返礼をしなくてはならないという認識を、被災した人たちが持ったという一節に目を惹かれました。すべてを失って返礼もできないから、援助も受けたくないというのです。このような気持ちは、神戸の人たちも同じように持っていました。精神医学者の中井久夫氏は、二十三年前の阪神淡路大震災のご自身の体験を『災害がほんとうに襲った時』（二〇一一 みすず書房）という本にまとめています。その中で、全国からの援助食料品や日用品をただで貰うことに、多くの人が抵抗を感じていた、と書いています。東北の人々、神戸の人々のこのような気持ちの持ち方は、支援物資が必要などろに行き渡らないなどの弊害も生みましたが、ある意味で、日常的な、常識的な（きわめて日本的と言われようと）気概を、混乱や喪失の中にあっても失わなかったということではないでしょうか。

ところで、乱暴な物言いですすが、住まいが倒壊したり焼失したりするだけなら再建できます。ところが、福島を中心とする原発の放射能汚染は、全く別の事態を引き起こしました。ある男性は、「宮城県の津波の打撃は確かにひどい。しかし、誰が亡くなったか、誰が家をなくしたか、その被害の規模はわかっていない。一方、我々はこの先どうなるのかさっぱりわからない。それが放射能の恐ろしいところだ」と言ったそうです。これは、飯館村の長泥地区のフィールドワークを行ってきた社会人類学者、トム・ギル氏が先の書物で報告しています。ギル氏は、「ふ

るさどという言葉ほどパワフルなものは、他の日本文化にはない」と指摘し、ふるさととは、昔から同じ所に暮らす人々の集団で、人と場所の組み合わせであると言っています（前掲『東日本大震災の人類学』）。言い換えるなら、日常の暮らしを営む共同体です。放射能汚染が起きた時、ふるさとの姿形は変わっていないのに、当たり前前の日常が続けられなくなりました。他の地域へ、あるいは他の国へ避難した人がいる一方で、汚染地域にとどまる人もたくさんいます。残った人々は先行きの見えない不安を抱き続け、一方、故郷を出た人々は、できるなら戻りたいと願っています。

さて、神戸の中井氏は、先の著書の中で、災害直後の神戸市民は寛容に助け合い、盗みなどの犯罪が非常に少なかったと書いています。これは、皆そうなのだから、という共同体感情で結ばれていた結果だと言っています。そのような共同体感情は、大きな災害を経験すると、地域を越える拡がりを持つのではないのでしょうか。最近の災害の度に被災地に寄せられる巨額な義援金、あるいはボランティアで援助する人が増えるのは、「わたし」ではなくて、「あなた」が被災したことに對して、すまないという気持ちが生まれるからでしょう。ありふれた言葉で言えば、明日は我が身とか、他人事ではないという思いでしょう。中井氏は、被災者として、「私たちは恩恵を乞うのではない、あなたたちの住む地域に次の震災が起きた場合のシミュレーションを天が行ったと思って、よりよい対応ができるように考えて

ほしい」と言っています。

唐突に、暴力的に、日常から、共同体から引き離される経験を、私たちの祖先は繰り返してきました。三陸沿岸は明治二九年、昭和八年にも大津波を経験しています。ギル氏の報告によると、この住民は「すべてに準備して生活するなんてできない、津波は来るときは来るんだ」と言うそうです。これは諦めではなくて、そういう危険も含めてふるさとを守るといいう気骨ともいえます。あれから八年が過ぎ、どのような状況が起きているのか、これから、漁労文化の側面から川島秀一さんにご意見をいただきます。また、過去からくみ取る状況の中に、未来に向けての示唆を見出せるのか、そのような視野も含め、各地での災害の記憶がどのような役割を果たしていくのか、花部英雄さんにご意見をいただきます。

（なかむら・ともこ／研究例会委員）